

28. すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。

わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29. わたしは心優しく、へりくだっているから、

あなたがたもわたしのくびきを負ってわたしから学びなさい。

そうすればたましいに安らぎが来ます。

30. わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからです。」

## 説教

イエスさまは、山の上で多くの群衆に神のことばを教え、それから病いに苦しむ人々を次々に癒し、湖上で襲いかかる大暴風をしずめ、悪霊に憑かれた人から悪霊を追い出し、死んだ少女をよみがえらせた後に、今度は12人の弟子たちをお選びになって彼らを遣わして宣教なさいます。しかし、それでも罪を悔い改めないコラジン、ベツサイダ、カペナウムに対し、その罪の故に神の怒りの炎で焼かれて滅び失せたソドムより悪いと非難してから、イエスさまは天の父を仰ぎ、天の父がこのような罪に満ちた世から特別に救いへとお選びになった者たちがあることを感謝して、天の父をほめたたえられたのでした。

福音を聞いて受け入れる者は、ペテロとアンデレのふるさとでイエスさまが数々の奇跡をなさったベツサイダの住民ではありません。カペナウムのような大商業都市の住民でもありません。天の父なる神さまが救いへとお選びになったのは、神さまに聞くことを必要としない「賢い者や知恵のある者」ではなく、むしろこの世では取るに足りない愚かな者であり、神のことばを聞くことを必要としている「幼子たち」でありました(25)。そして、さらには、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人」でありました。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。」(28)

「疲れた」と訳されている言葉は、「疲れている、労働している、骨折って労苦している、苦心している、苦勞している」という意味です。一般の労働をして、あるいは神さまのために犠牲を払って奉仕して、人のために骨折って奉仕して、苦心して、苦闘している、そして完全に疲れ果ててしまっている、といったような意味あいなのでしょう。「重荷を負っている」と訳されている言葉は、受身形で、私たちの心と足取りを重くさせる「(文字通り)積荷、荷物を背負わされている」、「(人生の)重荷を背負わされている」という意味です。

そして、そのような者たちに「わたしのところに来なさい。」とイエスさまは言われます。「来なさい」とは意識で、本来は「さあ!」とか「いざ!」といった強い呼びかけ、あるいは強制を意味し、敢えて訳すと「いざ、我がもとへ! 疲れし者、重荷を負わされし者らよ」となるのでしょうか。いずれにせよ、苦勞する者、疲れ果てた者、重荷を負わされている者たちは、どんなことがあってもわたしのところに来るようと、イエスさまは強力に呼びかけておられるのです。なぜなら、彼らこそ神さまに特別に選ばれた者であるからです。

そして、彼らにイエスさまは次のようにお約束なさいます。

「わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(28)

「休む *avnapau,w*」とは「*avna* 真ん中」と「*pau,w* 安息する」の合成語で、「一切の労働、労苦、活動から解放されて一時休息する」ことを意味し、「安心する、安らぐ、元気が出る」とも訳されます。イエスさまは、疲れた者、重荷を負う者を招き、一切の重荷から解放して十分に休ませて、再び立ち上がる力を満たしてくださるとい

うのでした。

それでは、どのようにしてイエスさまは疲れた者・重荷を負う者を「安息」させてくださるのでしょうか。それは、まずイエスさまのくびきを負って、イエスさまから学ぶことによってです。

イエスさまは言われます。

## 29. わたしは心優しく、

へりくだっているから、

あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。

そうすればたましいに安らぎが来ます。

## 30. わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

「くびき」とは、下の面に2つのくぼみをつけた頑丈な横木で造られた道具のことで、2頭の家畜の首に固定させて車や鋤を引かせました。隠喩的には、苦難や圧制、エジプトでの奴隷状態などの屈従を意味します。時には「神の律法」も「くびき」となります。イエスさまの時代には、律法を守らなければ救われないという人間中心の律法主義というくびきが、時代を支配していました。そして、これら人間の人間による支配、世の束縛、人の束縛という「くびき」によって、人々は疲れきっておりました。イエスさまは、このような奴隷の「くびき」から解放してくださいませ。そして、イエスさまのくびきを負えと言われるのです。そして、その負いやすく(直訳は「良い・憐れみ深い」)、軽いイエスさまのくびきを負いながら、イエスさまは「わたしから学びなさい」と言われます。その時に「あなたがたの魂のうちに安息を発見するであろう」というのです。「学ぶ」と訳される言葉は「習う、十分に理解する、悟る」という意味です。ここから「弟子」という言葉が派生しました。「心優しく」と訳される言葉はおもに「柔和」と訳され(マタイ5:5)、高慢になることなく「へりくだって」、あらゆる艱難に耐えて父なる神さまのみこころを行っていくイエスさまの生き方の本質を、実に的確に表現しています。そのような父なる神さまのみこころを全うしているイエスさまのもとに来て、イエスさまの言動をよく見て、学び、その真意を理解し、イエスさまの弟子となって、イエスさまと共に生きる、そこに真の「安息」を見出すことができるのです。

イエスさまは安息の主であられます。イエスさまが私たちに安息を与えてくださいます。イエスさまは私たちに罪と滅びという重いくびきから解き放ってくださいませ。この世の一切の束縛から解き放って、罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださいます。安息日も安息年もヨベルの年も、このイエスさまを知るための教材に過ぎません。イエスさまは安息日の主です。イエスさまは安息年の主です。ヨベルの年の主でもあられます。7日ごとの安息日の解放は、このイエスさまを発見し、イエスさまを学ぶためのものでした。7年ごとの安息年も、一年間一切の労働から解放されて、イエスさまを学ぶためのものでした。50年ごとに訪れる借金免除と奴隷解放のヨベルの年は、罪と滅びのくびきから完全に解放し釈放してくださる御国の王イエスさまを知るためのものでした。イエスさまが御国の王です。イエスさまが永遠のいのちです。イエスさまが安息そのものであられます。私たちは、イエスさまが私たちに安息を与えてくださるという事実を忘れてはいけません。自分の親が安息を与えてくれるのではありません。自分の夫が安息を与えてくれるのではありません。自分の妻が安らぎを与えてくれるのではありません。人に期待してはなりません。人に安息を期待するのではなく、むしろ人に安息を与える対象です。イエスさまから安息を、安らぎをいただいて、人に分かち与えるのです。

イエスさまは言われます。「**わたしがあなたがたを休ませてあげます。**」イエスさまが私たちに安らぎを与えてくださるのです。悪魔に攻められても揺るぐことのない永遠の安息を、永遠の安らぎを与えてくださるのです。そして、私たちキリスト者はこの安息へと召されました。安息を相続するよう召されています。イエスさまは、この安息へと私たちに召してくださいませ。疲れ果て、重荷を負う私たちに、安息へと召してくださいませ。

28. すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。

わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29. わたしは心優しく、へりくだっているから、

あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。

そうすればたましいに安らぎが来ます。

30. わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

体育館で宙返りに失敗して首の骨を折り、全身麻痺になった中学体育教師の星野富弘さんは、友人から贈られた聖書のこのみことばに心とらえられて、回心しました。彼は、重い罪と絶望のくびきのもとで、イエスさまのお呼びになる御声を聞いて救われました。そして、新しく生まれ変わって、人々に安らぎを与えていく者となりました。イエスさまは、今も私たちをご自身の安息へと召してくださっているのです。

この永遠の救いという安息へと召された私たちは、イエスさまの所に来て、イエスさまのくびきを負って、イエスさまから学び、安らぎを発見しつつ、イエスさまにある永遠の安息を隣人に分かち合いつつ生きていきたいと願います。